

『子どもへの愛』の社会学(1)

—— 子どもへの愛は本能か ——

山田 昌弘



1 子どもに対する愛の強調

「愛情のこもった教育」、この言葉ほど教育者や親として強調されるものはあるまい。また、この言葉ほど教育者や親にとって都合のよいものはない。子どもに暴力をふるったとしても、教育や親が行えば「愛のムチ」として許されてしまう。子どもに暴力をふるうのはどんな場合でも愛情から出たものではないと言い切る人もいるかもしれない。しかし、その人として何が本当の愛情から出た行動なのかはつきり答えられるわけではあるまい。

「愛情のこもった教育」は、その内容の曖昧さのゆえに、言葉として一人歩きしている。

本稿は、愛情のこもった行動（教育、しつけ、世話など）に関する小論である。が、このような行動こそが愛情が真にこもっているといった類の事を主張するものではない。強いていえば、ある個人が、ある行動を「愛情がこもっている」と評価すれば、その行動はその人にとって愛情のこもった行動となる。個々人で、愛情のこもった行動は異なるという点から出発しなければならぬ。視点を一段上げてみよう。近代社会では、「愛情のこもった行動」が理想とされ言及される。それをめぐってのトラブルさえある。その事自体が問題にされるべきである。理想化される、言及される、トラブルとなるという事の意味を、歴史的、社会的に考察していこう。

2 愛情の社会学

今まで愛情という言葉が無造作に使ってきた。いったい、子どもに愛情を感じるとか愛情のこもった行動とは

どのようなものであるのか。この問題は、情緒を感じる事、情緒的行動とは何かというもっと大きい問に行きつく。この点について考察してみよう。

従来、人間の情緒は、文学の対象であつたけれども科学の対象ではなかった。情緒現象が人間の行動や、社会現象の理解にとって不可欠な事が認識されたのは、つい最近である。社会学では、情緒社会学という分野が確立しつつある。同じものに対しても、人によって感じる情緒が異なる。メロドラマを見て泣く人もいれば悲しくならない人もいる。高い所に対しても、恐怖を感じる人もいれば感じない人もいる。このような現象を説明するために、情緒社会学では「情緒規則」という概念を導入する。同じものをみても人によって感じる情緒が異なっている。それは、個々人が内面化している情緒規則が異なっているからだ。我々が子どもに愛情を感じるのには、子どもという対象に愛情を感じるという情緒規則を（多くの場合無意識的に）教え込まれたからだ。このように、ある対象に触れて（見る、聞く、考える、etc.）情緒規則

によって情緒が発生する過程を、情緒喚起過程と呼ぶ。一度、情緒が心の中に生じると、人は、特定の行動をしたいという気持にかられる。例えば、恐怖という情緒は逃避行動を、不安という情緒は警戒行動をとるように人々にしむける。愛情という情緒が他人に向かう場合、他人のために何かをしたいという気持が起きる。つまり、情緒は行動の動機づけとして働く。これを、情緒表出過程と呼ぶ。例えば、子どもに愛情を感じるから子どもの世話をしたくなるといった事が、情緒表出過程に当る。

情緒現象にはもう一つ別のレベルがある。我々は、人の行動を見た時、その行動に込められた情緒的意味を汲み取ろうとする。例えば、母親が子どもの世話をするのは、「愛情」があるからだとか、恋人が自分に微笑みかけるのは、「好き」だからなどという理由づけをしている。他人の行動だけでなく、自分の行動に対しても（事前もしくは事後の）理由づけを行なう。このように、行動に対してその情緒的理由を考える事を、情緒的意味付与という。この視点は、近代社会における子育てのあり

方を考える場合、重要になってくる。子供への行動をめぐってトラブルが発生した場合、その行動が愛情から生じたと認定されれば、社会的にその行動は許されてしまう。例えば、子供の行く末を案じて親子心中をするなどというケースがこれに当る。逆に、自分では愛情からでたと意味付与しても、周囲から愛情がこもっていないと認定されれば、社会的に批難を受けることもある。

3 未開社会における子供への情緒の諸相

① 子供への愛のない社会

近代社会に住んでいる我々にとって、自分の子供への愛情、特に母性愛は、自然現象のように感じられる。それゆえ、「子供への愛情」という情緒規則の存在を意識することさえ難しい。未開社会の生活が文化人類学者によって明らかになるにつれ、子供への愛情は、決して自然なものではなく、文化によって造りだされるものだという事が分ってきた。

シャファアは、対照的な生活環境を持つ二つの民族の

例を挙げ、母性愛普遍説を批判している。イタ族は、アフリカの不毛の地に住む民族である。ターンブルの報告によると、「これらの人々の生活には、家族の情感や愛情のような楽しみ余地すらまったくなかった。子どもは、役に立たない余計なものみなされ、三歳になると親の家から追い出された。子どもはそのときから、おとなからの援助や指導なしに、もちろん親の愛情や慈愛なしに自分で生きていかざるを得なかった。……子どもが火の中に落ちて火傷を負ったときのおとなの反応は、おもしろがることではしかなかった。……」(シャファー『母性のはたらき』p.230)。一方、ニューギニアのムンドグモル族に関するマーガレット・ミードの報告によると、「ここにも母性愛のようなものはまったくなかった。……赤ん坊は、生まれたときからずっと、子どもに対する強い嫌悪に満ちた社会の中に置かれているからである。……母親は子どもの身に起る病氣や事故に対して、不きげんに憤慨しながら対応する。」(前掲書 p.221) ミードによれば、愛情がない原因は、ムンドグモル族の生活の豊さ

にある。子どもは親の援助なしに育つ事ができる。シャファーが指摘している通り、二つの社会は「子どもへの愛情なしに」機能している。つまり、子供への愛情は、本能でも社会の存続のために不可欠なものでもない。

② 前近代社会における子どもへの愛のパターン

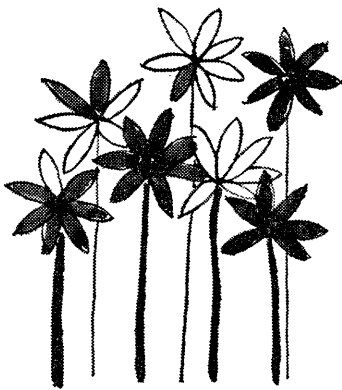
以上の二つの例は、極端にみえるかもしれない。すべての文化は平等だという立場に立てば、彼等の文化を異常として片付けるわけにはいかない。他の社会を見てても、子どもへの情緒規則は、我々の社会とは基本的な点で異なっている。

レヴィストロースは、膨大な未開民族の資料を調べ、子どもへの情緒態度に関する一つの法則を発見した。父親が子供に対し、厳しく敵対的な態度を持つ民族がある一方、優しく友好的な態度を持つ民族もある。一見、父親の子に対する情緒的態度は、民族によって恣意的に見える。しかし、母方叔父の子どもへの情緒的態度を加えてみると、子どもをめぐる情緒規則の構造がはっ

きりする。トロブリアンド島では、父と子のあいだの遠慮のない親密さ、甥と母方のおじとの著しい対立が見られる。ニューギニアのクトップ族では、父と子のこれほど親密な結びつきは見たことがないと評される一方、畏怖のニュアンスを帯びた甥と母方おじの関係がある。ココカサスでは、父と子のあいだに対立関係がある反面、母方おじは甥に優しくする。トンガでも、父と子はなれなれしくははいけないものとされ、甥と母方おじは気のおけぬ関係にある。要するに、子供にとって父が優しくれば母方おじが厳しく、母方おじが優しくれば父が厳しいという相補う関係が成立している。(レヴィ・ストロ

ース 『構造人類学』)

以上の例ほどはっきりしていなくても、子どもに対して愛着を感じ、気安く接する相手と、子どもに対して権威的に接する相手が分離している社会は多い。精神分析学者マーク・ポスターは、子どもに愛情をもって接する人と権威をもって接する人が分離している事は、子ども心理的安定にとってプラスであると述べている。子は、ある人はこわくある人は優しいという事があらかじめ分っているので、どのような態度をとるにしろ、不安になる事はない。(Poster 'Critical Theory of the Family')



近代社会では見られないが、近代社会では一般的な子どもに対する情緒規則の性格をもう一つ示そう。有名な女性文化人類学者であるマーガレット・ミードのサモア社会の報告をみてみよう。サモアでは、子供に対する権威が分散している。親を含む親族集団の誰もが子供をしつけ、働かせる権利を持つ。子供の方は、親の家が気に入らなければ「より気楽な親戚の家に移り住める」。(M・ミード『サモアの思春期』) 日本でも、少し時代を遡れば、オジやオバ、近所の人など、自分の子供以外の子供に情緒的に係わり、権威的、もしくは、愛情のこもった態度で子供に接していた。前近代社会では、このような情緒的関係をとり結ぶ人物が多数存在するのが一般的だ。自分の子どもだから愛情を持つとか自分の子どもだから叱るという感覚が相対的に薄い。子供と親は相互に情緒的に縛られる事がないため「人間関係が過度に緊張する事がない。」(ミード)

③ 近代社会の特殊性

前近代社会を概観してみると、我々の社会における子供への情緒的態度がきわめて特殊なものではないかという疑問が生じる。多くの前近代社会では、1. 子供に対する情緒的分業が行われている。子供に対し権威的に接ししつけを行う人間と子供に対し愛情を持って接し気安い関係を作る人間が分離している。2. 子供に対し情緒的に係わる人間が多数存在する。それに対し、我々の社会では、1 子どもと一人の大人との間に権威と愛情という正反対の情緒的態度が存在する。2 父母など少数者に子どもとの情緒関係が限定されている。

次回では、近代社会の成立と共に、子どもに対する情緒的態度が変容していく過程を解説する。

(東京学芸大学)